

Emergency



神戸こども初期急病センター

2015年1月受診者数：4389人

【訴え】

1. 発熱 : 3469人 (3086人)
2. 咳嗽 : 2147人 (234人)
3. 鼻汁 : 1680人 (17人)
4. 嘔吐 : 787人 (327人)
5. 痛み : 519人 (95人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

【疾患頻度】

1. インフルエンザ : 1852人
2. 急性上気道炎・咽頭炎 : 1016人
3. 感染性胃腸炎 : 439人
4. 気管支炎 : 139人
5. 気管支喘息・喘息性気管支炎 : 120人



2月に入りましたが、雪が降るなどまだまだ寒い日が続きます。今年1月は神戸初期こども急病センターへの受診者は4389人で、昨年のこの時期よりほぼ千人、受診者が増加しています。インフルエンザ陽性者がそのうち1852人と、昨年年末から引き続き大流行しているようですがほとんどがA型です。2月に入り、B型も少しずつ増加してきているようです。

さて2015年1月15日に、こども急性疾患学講座の主催で、神戸小児感染症セミナーが開催されました。トピックとして、森岡一朗特命教授より「低出生体重児のB型肝炎母子感染予防」、そして特別講演として前国立感染症研究所所長の岡部信彦先生より「デング熱、エボラウイルス病などの国際感染症」について貴重なご講演をお聞きすることができました。細菌の感染症は抗生物質が効果的ですが、ウイルスについては、抗ウイルス薬があるようなインフルエンザや水疱瘡などをのぞき、やはり感染予防、つまり手洗いやうがい、マスクなどの対策や、ワクチンが重要です。エボラウイルスなどは、生命の危険が大きいウイルスではありますが、その感染経路をきちんと理解し対応することも大事だということ学びました。ワクチンといえば、平成27年1月10日に、「B型肝炎ワクチン、厚労省が定期接種化提案-早ければ2016年度にも実施へ」というニュースが発表されました。世界に遅れをとっていましたが、我が国もようやくB型肝炎ワクチンのユニバーサル化(定期接種化)が実現に向けて動き始めました。これを実現するための大きな課題は、我が国の小児のB型肝炎ウイルスの水平感染に関する疫学データ、特に大都市のデータがないということでした。そこで、倫理委員会の承認と保護者の皆様が同意をくださった神戸初期急病センター受診児の残余血清検体を用いて、1400人以上の児で調査しました。その結果、神戸市近郊で1%程度の水平感染(母子感染ではなく)が起こっていることを明らかにできました。そのデータが厚生労働省 厚生科学審議会 予防接種・ワクチン分科会、予防接種基本方針部会で報告され、大きく貢献しました。こども急性疾患学部門として私たちの研究成果を、国民や市民に還元することがひとつの役割ですので、B型肝炎ワクチン予防接種の定期化として還元できるところまでできましたことは、神戸市が国に対し誇れる業績だと考えます。引き続き、こども急性疾患学部門の研究が社会に貢献できるように研究成果を上げていきたいと考えています。